No. 192

ティーブレイク

Tea Break

メモリーチップ

会員　正林　真之

寝ている間に見る夢というのは，現実と幻想とが，それまた個々に真実味を持って現れるので，何とも言えない奇妙な気持ちになる。デジタルデータが消えないことは世間一般の常識になりつつあり，我々弁理士も本当に気をつけねばならないことなのであるが，脳の中の記憶もそんなものなのだろうか。その夢を見たのは，東京に初雪が観測された日であった。

自分は今の自分なのであるが，なぜか幼いままの息子と電車に乗り，間違って上りの電車に乗ってしまった。場所は，故郷の茂原駅であり，なぜか旧駅舎である。旧駅舎であるのに，それについては何の不思議もなく受け入れられている。雪が降っている。母は下りのホームに居るというのに，僕らは間違って上りの電車に乗ってしまったのである。

次の駅で引き返そうと，ガラケーを必死に操り，母の番号を探す。けれどもそこに母の番号は無い。いくら探しても見つからないのだ。焦って下りの電車に乗って連絡しようと思っても，まったく連絡できないのである。

しかし，既にこの世に居ない人間の電話番号など，あるはずがない。そして，たとえ夢の中の話であったにしても，死んだはずの母の番号を一生懸命に探すというもの，本当に奇妙な話である。母の番号が無いことなど，分かり過ぎるぐらいに分かっていたはずなのである。けれども，その夢の中の時の自分には「無いはずはない!」「絶対に，あるはずなのに」というしっかりとした感情があった。こんな感じで，「死んだはずの人間の番号を必死に探す」という幻想と，「でも，その番号は無い」という現実とが，それぞれがリアルな状況で交錯した誠に奇妙な夢であった。

こんな奇妙な夢を見た理由は明白である。要は自分は，もう20年以上も前に起こった母の死を，まだ認めていなかったのである。田舎に帰らねば会えないのと同じように，どこかで生きていてずっと会えないかのようなそんな深層心理を持った状態で生活していたのであろう。確かに，30年以上も会っていない知人も，少なからずいるではないか。

実際，葬儀のときには死に顔も見ているし，お骨も拾った。何か良いことがあれば，「ああ，お母さんが生きていたらねぇ…」と言われ，母の死を自覚させられる。けれども，それらをもってしても，まだ母の死というものを，心のどこかで認めていなかったのである。

でもこれは，これを読んでいる方々のほうも，少なからず心当たりがあるのではないだろうか。そう，人間というのは，目の前に起こった現実でも受け入れられず，そんな日々の中を，現実との間で不器用にバランスを取りながら，なんとか生きているものなのである。

ところで，携帯電話といえば，お葬式の日に，いつも気まぐれにかかってくる母からの少しばかり迷惑な電話のことを妹や弟に話した。そうしたところ，「そんなことは，あったことが無い」という意外な答えであった。もしやと思って母の遺品を調べてみたところ，母の携帯にあったのは，私の番号だけであった。

よくよく考えてみれば，母にしてみれば，郷里に居る妹や弟たちとは，いつでも会いたいときに会える。けれども，家業を継がずに都会に行ってしまった長男。手塩にかけて育てたはずなのに，自分の下から去ってしまった。そして，郷里では殆ど誰も行かない大学院に進学したかと思うと，中退してしまう。そして，聞いたことも無いような資格試験に挑戦し，受かったかと思えばいきなり独立開業してしまう。心配すれば，きりが無い。

こんな心配ばかりかけていた母親の検査入院の日に，珍しく見舞いに行って色々と話をしたが，「次に言おうと思って」ということで，退院した後にきちんと話そうと思い，取っておいたネタがあった。その中身も素晴らしく，まさに「とっておきのネタ」であった。母が聞いたら，どんなに喜んだことであろう。けれども，結果的に母の退院は叶わず，それを聞かせることはできなかった。もしあの時に話してさえいれば，それを生き甲斐にして生きていたかもしれないのにと，そう思った。

よくよく考えてみれば，弁理士試験の講師をしていたときもそうであったのであるが，話すタイミングを得たときには，出し惜しみなどを一切せず，全てを話してしまう。全てを言ってしまうから，次にもっと新しいものを考えねばならなくなる。そうやって自分を常に追い込んで，新しいものを作っていく。そうした過程で，常に自分の能力以上のものを要求され，それに応えていくことで，成長してきた。

今になって考えてみれば，この習慣は母の死から与えられたようなものである。そうやって考えてみていると，なぜか目の前がかすむ。そうして思う。「今の自分がこうしていられるのは，あの母の死があったからだ」と。「母さんの死のおかげだ」と。

ただ，今の自分を肯定するためには，母の死を認めねばならない。それはまさに今朝方に見た夢と同じである。そしてまた改めて思う。「もう自分は子供ではなく，自分のほうが親なのだ」と。そしてそれを悟った今のその瞬間に，母は私の中で”本当に”死んだのだ。もう，ああいった夢を見ることは，二度と無いだろう。